



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

# OVERSEAS

## Republic of Uganda

— ウガンダ共和国 —

### 海外事情



# 初めての海外出張「ウガンダ」滞在記



寺西 名子 TERANISHI Minako

株式会社片平エンジニアリング・インターナショナル / 開発業務本部 / 環境社会開発室

「ウガンダ」と聞いて、どのような国か分からない方もいらっしゃるかもしれません。ウガンダは日本から約11万km離れたアフリカ大陸東側の内陸国です(図1)。そして、私にとって初めての海外出張先でもあります。ウガンダでの初めてづくしであった私の経験を紹介します。

### 豊かな自然と多様な動物

ウガンダはかつてイギリスの首相ウィンストン・チャーチルが「アフリカの真珠」と呼んだほど緑が豊富な美しい国です。ウガンダの自然の中で有名なものの一つがヴィクトリ

ア湖です。ウガンダ、ケニア、タンザニアの3カ国の国境が走る面積約7万km<sup>2</sup>、琵琶湖の約100倍もある湖です。アフリカで最大の湖で、淡水湖では世界第2位の大きさを誇ります。湖ではモーターボートに乗って、白ナイル川の起点である「ソース・オブ・ナイル」を見ることができそうです。ここから白ナイル川は南スーダンを通り、スーダンの首都ハルツームでエチオピアから流れる青ナイル川と合流し、エジプトから地中海に注ぎます。

野生動物も有名で、10カ所ある国立公園には、カバ、ワニ、ライオンな

ど多様な動物種が生息しています。絶滅危惧種のマウンテンゴリラがいる国立公園では、このゴリラを見るトレッキングツアーが国内外の観光客に人気だそうです。

私が従事した調査の対象地は、ウガンダの首都カンバラから北西に約500km離れた、アルアという町を中心とする西ナイル地域です(図2)。そこへの移動中で国立公園を通過する際、車中からゾウやカバ、「バブーン」と呼ばれるヒヒを見ることができました(写真1、2)。運転手の話だと、過去にゾウと大型バスが交通事故を起こしたこともあるそうで



写真1 国立公園付近のゾウ



写真2 国立公園付近のバブーン

す。また、国立公園外でも、多様な動物を見ることができました。例えば、鮮やかな緑色をしたグリーンズネークですが、人間を死に至らしめてしまうほどの猛毒を持っているそうです(写真3)。



写真3 猛毒を持つグリーンズネーク

### 地元の食事

現地の食事が自分の舌と体に合うかどうかは、海外で健康を維持する上で重要です。自然豊かなウガンダでは、道路を走っていると、マンゴーやバナナ、ジャックフルーツ、パイヤの木を見ることができ、毎朝、美味しいフルーツをいただきました。

また、地元の人に人気のレストランのランチ定食は、牛や鶏、ヤギなどのお肉かマメのスープと主食がセットになっています(写真4、5)。主食は、米やとうもろこしをひいた粉とお湯を混ぜて練り上げたポシヨ、ふかしたキャッサバ、「マケト」

と呼ばれる甘くない調理用バナナを蒸したものなどから選ぶことができます。ポシヨは、もちもちした食感で、どっしりとお腹にたまります。スープはシンプルな味付けながら、トロトロになるまで煮た肉の風味がよく溶け出していて、主食とよく合います。これに、日本の青菜のような野菜やキャッサバの葉の炒め物が添えられます。使う調味料は塩が多いようで、人によっては、唐辛子で辛さを足します。なお、ウガンダで「pepper(胡椒)をください」と言うと、一味唐辛子か唐辛子そのものが出てきます。

地元マーケットに足を運んだ際、



図1 ウガンダの位置 (Google Map より)



図2 カンバラ～アルア間の距離 (Google Map より)



写真4 地元レストランでのランチ定食



写真5 地元レストランの店員



写真6 地元マーケットで販売していた乾燥羽アリ



写真7 白ナイル川で獲れた魚

変わった食材を見かけました。それは「羽アリ」です(写真6)。現地では貴重なタンパク源だそうです。日本で良く見られるアリよりも少し大きな羽アリは、乾燥状態で販売されていました。味付けはされておらず、料理に使います。

白ナイル川やヴィクトリア湖では魚を獲ることができ、マーケットで販売されています。大きな生魚や干物の魚もあります(写真7)。美味しいと思った魚はティラピアです。ヴィクトリア湖等で獲れるもので、ウガンダでよく食べられる魚です。レストランの人に勧められ、素揚げにトマトソースをつけました。川魚は泥臭さがあるかと思っていましたが、鯛のような味で美味しくいただくことができました(写真8)。

結果的に、訪問した先々の地元料理とは相性がよかったようで、全て美味しくいただきました。しかし、1回の食事としては主食の量がとても多かったです。注文の際、「量は半分にして、値段はそのままがいいから」とお願いしても、主食がお皿に

山盛りで出てきます。多いと言いつつ、毎回完食していたため、少しふくよかになって帰ってきました。食べすぎを防ぐために、ラップやジップロックを用意しておき、食べきれなかった食事を持ち帰り、夕食に回すなどするほうが良さそうです。

### 正直で優しい人柄

現地スタッフや現地調査員から、「自分たちウガンダ国民は優しい人柄だ」という話をよく聞きました。これについて、印象深いエピソードがあります。

ある現地事務所を訪れた際、事務所のセキュリティゲートで忘れ物をしました。それは、広島出身の私が愛する広島東洋カープのロゴ入りで、とても気に入っている4色ボールペンです。書き味もよく、使い慣れた大切なボールペンをウガンダに持ってくるべきではなかったと後悔しつつ、どうしても諦めきれませんでした。数日後、タイミングを見計らいセキュリティゲートのスタッフに、「数日前に訪れた者だけれど、赤いボー

ルペンが忘れ物になかったか」と尋ねました。すると「確かに赤いボールペンが忘れ物にあった。今それは私の家にある。家はすぐそこだから取りに行ってくるよ」と家に戻り、返してくれたのです。

「そんなボールペンはなかった」と門前払いされるだろうと想像していました。また、家に持って帰っていたということは、私が尋ねた際、そのまま何も言わず、自分のもののできたはずです。セキュリティスタッフが正直に話してくれて家まで取りに帰ってくれたおかげで、お気に入りのボールペンと共に帰国することができました。

これだけのエピソードで、ウガンダ国民が優しい人柄と証明することは難しいですが、私には「ウガンダの人たちは正直で優しい人たち」という思い出になっています。

### 武力紛争

アフリカでは紛争や内戦を経験している国が少なくありません。自然豊かで優しい人柄のウガンダもそ

の一つです。ウガンダでは1980年後半から約20年間、武力紛争が続きました。その結果、北部は南部に比べ、開発が遅れたと言われていす。そのため紛争後、中央政府はもとより、国連、NGO、諸外国による復興・開発プロジェクトが実施されています。

### 難民の存在

ウガンダは北に南スーダン、東にケニア、南にタンザニアとルワンダ、西にコンゴ民主共和国(旧ザイール:コンゴ共和国とは違う国)の5カ国に囲まれた内陸国で、道路に国境線が通っている地域があり、反対車線は隣の国という場合もあるので、人が移動しやすく、国境沿いの地域は隣国の政治・社会・経済の影響を受けやすいです。

その例の一つが、難民の存在です。難民とは、1951年の『難民の地位に関する条約』で「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいると迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるため他国に逃れた人々」と定義されています。

ウガンダは、隣国の南スーダンやコンゴ民主共和国、さらにちょっと離れたブルンジやソマリアなどからの難民を常に受け入れており、「難民に寛容な国」と称されることがあります。例えば、調査対象の西ナイル地域では、現在100万人を超える南スーダン難民が滞在しています。世界最大規模の難民居住区もあり、地元人口の118%に当たる約22万人の難民が居住しているのです。

難民キャンプというと、敷地の中に国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が設営したテントがずらっと並び、難民は外には出られないというイメージを持っていました。

しかし、西ナイル地域の難民居住区は違いました。ウガンダでは、難民に移動や就業の自由があり、難民用に整備された診療所や学校に加え、地元住民が通う医療施設や学校にも通っています。また、食糧などの支援物資を受け取って生活していますが、自分たちで食べるために家庭菜園で野菜も作っています。ここでは、地元住民と難民が非常に近い距離で生活していると感じました。

### エボラ出血熱

隣国の影響を受けやすい別の例は、エボラ出血熱という感染症です。これに感染すると、吐血や血性下痢、皮下出血など、体内の複数カ所で同時に多量の出血が起きることがあります。20~90%という致死率の高さが特徴です。

隣国のコンゴ民主共和国では、ウガンダ国境地域で2018年8月からエボラ出血熱の感染者が相次ぎ、世界保健機関(WHO)は翌年7月に「国際的に懸念される公衆衛生の緊急事態」を宣言しました。ウガンダでも感染者と死者が発生しました。私が渡航した2019年6月も、コンゴ東部ではエボラ出血熱の流行が続いていました。コンゴで祖父の葬儀に参列した後、家族と一緒にウガンダに来た子どもが、エボラ出血熱と診断されました。ウガンダ政府は国内で感染が拡大しないよう警戒していたので、患者発生を確認後、直ぐに国境の検疫を強化し、接



写真8 ヴィクトリア湖産のティラピア料理

触者をモニタリング、国民には握手やハグを避け、石鹸で手を洗うことなどを通知して、感染防止措置が実施・徹底され、拡大を防ぐことに成功しました。

世界的に新型コロナウイルスの感染が拡大しており、ウガンダもその影響を受け、2020年3月下旬に空港閉鎖と国境通過制限が始まりました。ウガンダでは、エボラ出血熱に対する検疫強化が最近の新型コロナウイルスへの検疫強化体制にも活かされているように思います。

### ウガンダへの想い

それまで行ったこともなかったウガンダへの海外出張は、何もかも初めてづくしで、出発前も着いてからも、不安や緊張がありました。しかし、「美味しい地元の料理をまた食べたい」「出会ったあの人たちは新型コロナウイルスに罹らずに元気だろうか」とウガンダのことを思い出します。

新型コロナウイルスにより海外出張がなくなってしまいました。少しでも早くこの感染拡大が終息することを願いながら、ウガンダにもう一度、行ける日が来るのを待っています。